

JAIRO Cloud導入前後における機関リポジトリの オープンアクセスコンテンツ利用 Open access contents usage in Institutional Repository

学籍番号：201721667

氏名：小林 俊貴

Kobayashi Toshiki

オープンアクセスの転機として知られる BOAI から 17 年が経過した。オープンアクセス実現に向けた手段の一つである機関リポジトリは、日本国内だけで 754 機関で運用がなされている。日本での機関リポジトリ構築数の増加に影響を与えた要因として、当初の各機関による独自構築の機関リポジトリからクラウドベースでリポジトリを構築することのできる JAIRO Cloud への変化が取り上げられる。本研究では、インフラストラクチャとして普及した機関リポジトリの長期的なコンテンツ利用実態を調査し、機関リポジトリを独自構築していた機関が、JAIRO Cloud を利用することで、どのように変化したのかを調査した。

本研究の調査対象は、筑波大学機関リポジトリ「つくばリポジトリ(Tulips-R)」の 2010 年 3 月から 2014 年 3 月までアクセスログと 2014 年 5 月から 2017 年 12 月までアクセスログである。期間の前半では、機関リポジトリの構築に DSpace が用いられており、後半では、JAIRO Cloud が用いられている。手法としては、アクセスログ分析を用いる。対象アクセスとなるアクセスログをフィルタリングし、コンテンツ利用動向を反映していると考えられるデータを抽出する。機関リポジトリの利用状況を概観し、紀要、学術論文、学位論文、Research Paper のコンテンツに関しては個別の分析を実施する。

結果として、2014 年 5 月以降のコンテンツ利用回数の増加、2014 年までは利用のなかったコンテンツが利用される様に変化したことが明らかになった。紀要や Research Paper に関しては、2014 年 3 月以前は利用されていなかったコンテンツが多数存在していた。2014 年以降、紀要は広範な資料が利用されることとなった。Research Paper は紀要ほど利用が増加しなかったが、50%以上の資料が利用されるようになった。学術論文や学位論文に関しては、90%以上のコンテンツが利用されていた。

紀要や学位論文は、STEM 分野だけでなく大学の特色を反映した分野のコンテンツが多く利用されていた。登録された年度別にコンテンツを分析した結果利用されるコンテンツの経年における減衰は現れず、コンテンツ数に依存した。

DSpace と JAIRO Cloud におけるオープンアクセスコンテンツの利用を比較すると、JAIRO Cloud にて機関リポジトリを運用している期間の方が、広範なコンテンツの利用がなされている。コンテンツ利用全体では、毎年前年度の 2 倍程度に利用が増加している。コンテンツの利用という面では、JAIRO Cloud への移行は成功であったといえる。同時に、データの利活用を考えた機関リポジトリの運用において今後検討すべきの側面も明らかとなった。

研究指導教員 逸村 裕
副研究指導教員 歳森 敦